



心理学へのプレリュード



ウインザー大学 名誉教授

小橋川 慧 (こばしがわ あきら)

1963年、アイオワ大学 (Ph.D.)。1964～69年、琉球大学教育学部助教授。以降、ミシガン州立大学で客員教授、ウインザー大学で教授を歴任。専門は発達心理学。著書は *Perspectives on the Development of Memory and Cognition* (分担執筆, Lawrence Erlbaum Associates) など。

自己紹介

私は1945年8月15日の終戦の日を、「冬のソナタ」のロケ地で知られるようになった韓国の春川市で迎えた。同年の10月中旬、対馬海峡を15トンの密航船で渡り小倉に上陸。しかし、そこから先の目的地がない。父の郷里は沖縄で、そこに乗り込んできた米軍は日本から沖縄に対する主権を取り上げていた。終戦で帰るところを失った小学校6年生の私は、宙ぶらりんな日本人になった心理状態だった。

「沖縄に近く空襲のなかった町」という理由で父が選んだ行き先は薩摩大口町 (現・伊佐市)。そこで出会った人たちの善意に助けられ、私は中学生になった。1946年の夏、沖縄からの疎開者の引揚げが始まり、私たちもそれに便乗し、その年の冬「鉄の暴風」の吹き荒れた沖縄に引揚げた。引揚げた集落には数多くの米軍野戦用のテント小屋が設けられていて、その一つが我が家だった。

米軍統治下の沖縄にはマイナスもあったがプラスもあった。その一つがガリオア資金 (占領地域援助資金) による米国留学制度。1954年から2年間、この制度によりアメリカ南部の大学での「偉大な異文化体験」を経て、私は「沖縄の、沖縄による、沖縄のための」大学で仕事をするようになった。

当時のアメリカは明るくゆとりがあり、太平洋の孤島から発信す

る些細な研究上の問いにも援助を惜しみなく提供した。アイオワ大学児童福祉研究所から「助手採用」の通知が来て、1960年、2度目の渡米となる。ミネソタ大学児童発達研究所でポスト・ドクを務めた後、1964年、琉球大学に再就職した。一連の研究がまとまった頃、ミシガン州立大学心理学科に招かれて1968年、3度目の渡米。「生涯に一度、初対面の人を相手に自分を売り込んで望む条件で仕事をするのも面白い」——こうした若気の至りで1969年以来カナダ・オンタリオ州に住む結果になった。北米の大学で何とか仕事できたのは、この過程で世界的研究者との「偶然の出会い」があったことに負うところが大きい。

アイオワ大学では、後に関西学院大学学長になる若き日の今田寛氏に出会い、交流が続き、客員教授として関学で2度教えることになった。その折に、西里静彦トロント大学名誉教授に「偶然の出会い」をした。その西里先生の強いご推薦によりこの欄に登場することに相成った次第。まず、60年前の米留懐旧談にお付き合いを。

英語科から心理学科へ

アメリカに留学する前、私は琉球大学英語科に席を置いていた。将来何を専攻にするにも英語は必要だと思ったからだった。

私が小学生のころ、教師が子どもにビンタだけでなく鉄拳を加えることさえもよくあった。そんな時代に、子どもの意見を「おーそ

うか」と聞いて「こんな風には考えられないか」と指導する不思議な先生がいた。大学に入った頃、この先生に、昔「体罰」を使わなかった理由を尋ねた。そのおりに、「君、心理学は面白いよ」と言われたことが心理学に興味を持った始まりだと思う。はっきりと関心を持つようになったのは琉大の3年の時。創設4年目の琉大で、中央の学術誌に研究を発表したことのある与那嶺先生が心理学担当だったことだ。学者らしい先生に個人的に勉強の指導を頼みたいと思っていた。さらに、赤嶺利男氏が修士課程を終えてアメリカから帰沖し、琉大で心理学系の教科を担当した。アメリカでは東江康治・平之兄弟が心理学を勉強しており、将来琉大には優秀な心理学研究者が集まる、と楽しい話を赤嶺氏はした。後に聖和大学 (2009年に学校法人関西学院に合併) の教授になる黒田実郎氏からは、当時の沖縄では得られない日本心理学会の状況が書かれた手紙が来て、アメリカで勉強をするなら心理学は有望な分野だと励まされた。心理学への興味を示すと親切的な支援者が次々と現れた。

米国留学試験に合格した私は、申込用紙にアメリカでの専攻科目を「心理学」と書いて米国国際教育研究所に送った。配置校はテネシー州の首都ナッシュビル市にあるピーボディ教育大学 (George Peabody College for Teachers) という知らせが来た。この大学は、

南北戦争後、南部の白人教育振興を目的に創立された学校だ。キャンパスは名門ヴァンダビルト総合大学と隣接して、学生は双方の大学の教科を自由に履修できた。ピーボディーは1979年にヴァンダビルト大学に吸収されて、現在の正式名は、Peabody College of Education and Human Development at Vanderbilt Universityである。余談だが、大学ランキングで有名なUS News & World Reportによると、278の教育学大学院中、ピーボディーは過去5年間ナンバーワンにランクされている。

1954年7月中旬、琉球大学4年目の1学期を終えた私は、米軍輸送船で「昼は海原を、夜は映画を」という単調な生活を2週間過ごした後、金門橋の雄姿に感激してサンフランシスコに上陸した。目的地ナッシュビル市に着いたのは9月中旬だった。

翌日、新学期前で人もまばらな大学のキャンパスを歩いていると、イエーツマンという社会学科の教授に、「外国人学生ですか」と話しかけられた。琉大を中退して心理学専攻を希望していた私は、学部レベルに心理学専攻の無いピーボディーに配置されたことに不満があった。部屋に案内された私とその不満を話すと、教授は私の成績表を調べて、「英語の単位が多いから、専攻を英語にできるだけ早く卒業しなさい。そして大学院に進んで心理学を専攻すればよい。ピーボディーの大学院心理学は主任教授のリーダーシップでどんどん発展するよ」とアドバイスしてくれた。「英語の学士で大学院の心理学科に進めるのかどうか」を尋ねると「英文学の学士も心理学の学士も同じ学士だ」と簡単に言われた。実際、心理学科の主任教授も学部レベルで

心理学の必修科目を履修していない私の経歴を全く問題にしなかった。現在、オンタリオ州では心理学者になるための基準は厳しい。私のような経歴の学生は、私の勤めたウインザー大学の心理学科大学院への入学は不可能だろう。

イエーツマン教授に教えられたように、これまで履修した科目を専攻、副専攻、選択、教養科目に分類した表を作った。それを持って「編入学年」の話をするために事務局長に会った。事務局長は私の大学までの教育年数が10年しかない点を指摘して、大学1年目は高校とみなし、2年目からの単位数だけを受け入れるという。計算してみせ3年次に編入だと言って譲らない。その夜あることに気がついた。セメスター制の琉球大学の1学期は18週間だが、クォーター制のピーボディーの1学期は12週間。つまり、琉大の3単位はピーボディーの4.5単位として換算しなくてはいけない。こう計算すれば琉大2年目からの単位だけでも、十分4年次に編入できる。翌日大学に出かけて、事務局の単位換算に誤りがあったことを指摘した。「欲しいだけ全部やろう。君、事務局で働かないか」と事務局長は苦笑いして言った。私は英文科4年次編入に成功した。

「駅馬車の馬」のように

私は小学校の校訓、「よく学び、よく遊べ」を実践した。4年次への編入を大学に認めさせた私は、留学1年目の1学期、計16単位も登録した。1時間の講義に普通2時間の予習が要求されるが、私の場合、言葉のハンディを考えると3時間が必要だろう。すると毎週64時間（授業に16時間＋予習に48時間）、あるいは毎日最低10時間は机について

いないといけないことになる。それに、どの科目でも小論文を要求するので勉強時間はさらに必要になる。と、考えたのはだいぶ後になって「単位制」を理解してからだった。ともかくよく勉強した、いや、させられた。

最初のクラスで最前列に席を取り緊張していると、二人の女子学生が私の隣に座って自己紹介をして私の名前をきいた。「沖縄？ 何処にあるの」といった会話をしていると教授が入ってきて、私の顔を見るなり「私はドクター・グリフン。ピーボディーによろこそ」と握手を求めた。フレンドリーな雰囲気でも始まったせいか、私はグリフン教授のクラスを楽しんだ。

グリフン教授の授業は典型的なアメリカの大学のクラスといえる。授業の第一日目に、毎週のテーマと必読文献をリストし、試験の日を明記した講義概要が配布された。3週間おきにテストがあるので、課された相当量の文献を規則的に読まなくてはならない。自由に読書を楽しむ暇はない。アメリカの学生はまるで駅馬車の馬のように、教授の手綱さばきによって決められた方向と速度で勉強しているような気がした。そんな私の批評に対して「教授たちは教授生命・名誉をかけてシラバスを作っていて、あの文献リストは価値のあるものだ」と一年先輩の留学生だった上里さんが解説してくれた。私がこのことに気づいたのはずっと後のことだった。また、1学期分の講義の内容や順序などを前もって決められるというのが理解できなかった。私が評価の方法も記述したシラバスを初めて作ったのは、1968年、ミシガン州立大学で教えた時だった。

グリフン教授のように決められたトピックについて組織だった講

義をするクラスは良かった。社会学のブレアリー教授はジョークで講義を始めるのだが、これを理解するにはアメリカ南部の歴史・社会の知識が必要だった。みんながどっと笑っている時に一人笑えないのは実にづらい。ある時どういうわけかみんなと一緒に声を出して笑ってしまった。ブレアリー教授は怪訝そうな顔をして私を見て、「今のジョーク分かったのか」と意地の悪い質問を、フレンドリーな雰囲気の中でした。とっさに「笑いは伝染する」と返すと、教授は首をすくめて「コバシガワは shrewd な奴」と言った。

「文化交流」の新しい解釈

勉強に精を出すと同時に、アメリカの社会についても好奇心があった私はいろいろな集いにも精神的に出かけて「遊び」も忘れなかった。金曜の夜になるとゲームやダンスを楽しむ「クリスチャン学生集い」があった。シャイなアメリカの学生がいて、「いい社交場があるよ」とこの集いに連れて出かけたこともした。

私が最も積極的に参加したのは、ピーボディーとヴァンダビルト大学の共同組織「国際学生クラブ」だった。メンバーはほとんどが外国人学生だったがアメリカ人学生もいた。イスラエルの学生と気が合って、「来年は私たち二人が会長と副会長になって会のムードを変えよう」と、余計なことに首を突っ込んでしまった。

集いには欠かさず出席し、晩餐会では寸劇まで披露した私の活動が目立ったのか、次年度の初めに大学の留学生係と事務局長が私に

国際学生クラブの運営について意見を求めてきた。ところが、学期が始まり役員選挙の集いで、予想外のことが起きた。マニラ市出身で教育行政専攻の学生が立候補して、私を抑えて会長に選出されたのだ。「会のプログラムの計画は副会長の君の仕事だ」と事務局長は私の肩を叩いて激励してくれたが、憂鬱な気分だった。新会長は、戦時中、二重スパイの役割を務めたという。アメリカ軍の情報を教える振りをして日本軍の様子を探り、それを米軍に教えた、と得意そうに喋っていた。1945年のマニラの日米攻防戦で約10万人のフィリピン人市民が死傷したといわれ、信憑性はともかく、理由として日本軍が軍民を区別することなく残虐な行為を繰り返したからだという説があった。こういった日本軍のことが会話の最中にふと飛び出す時代で、35歳も年上の新会長とは仕事がしづらかった。

ともあれ、各国自慢の食べ物を紹介する集い、初めて試みたダンスパーティー、学年末恒例ディナーなどの催しは盛会で、アメリカの学生の支援もあってクラブはよくまとまっていた。ヴァンダビルト大学の好意で、多くの留学生が初めてアメリカン・フットボールの大学対抗試合を観戦することもできた。

私がインターナショナル・クラブの副会長を務めたのは、大学院一年目の学業に専念すべき時期だった。「留学生には、『文化大使』として『文化交流』という仕事もある」とよく言われた。そんなことを得意気に喋る私に、「国際フ

ード・ショーだけが文化交流ではない。勉強して、アメリカの研究者と共同研究ができるようになるのも、持続性のある文化交流じゃないか」と言った、心理学科主任で1966年にアメリカ心理学会会長になるニコラス・ホップス氏の言葉が忘れられない。

私は外国人学生のアメリカの大学成績を予測する変数について修士論文を書いた。「あなたの学業成績を含む個人情報を探ることになりますが」と書いて協力を依頼したところ、ピーボディー大学外国人学生のほぼ全員が快く私の調査に参加してくれた。「米国留学という恩恵を受けた者の義務だ」と言って調査に参加してくれた学生もいた。参加者の動機はともかく、論文作成に支援してもらえ、国際学生クラブの副会長を務めたことはロスばかりではなかったようだ。

終戦直後の1946年、アメリカでは児童心理学のハンドブック *Carmichael's manual of child psychology* が出版された。大学入学直後にそれを手にした時のことを岡本夏木氏は次のように書いている。「その分厚さと、紙質の輝きや図表の鮮明さは、それまでの戦中戦後の粗末な自国の本に接して来たわれわれにとっては驚異であった。発達心理学との感覚運動的出会いであった」——「感覚運動的出会い」とはうまい表現だ。次回は、私自身の発達心理学への興味を振り返り、その途上で出会った人々について語りたい。

読者の声投稿募集中！

『心理学ワールド』への、ご意見・ご感想をお待ちしています。

投稿は、お葉書・Eメールどちらでもけっこうです。世代と性別をあわせてお知らせください。

●送付先 〒101-0051 千代田区神田神保町3-9 第一丸三ビル3F (株)新曜社 第一編集部 morimitsu@shin-yo-sha.co.jp